清宗根付館 便り

当館では根付の普及活動の一環から、2021年9月2日(木)～5日(日)にかけて京都芸術大学・春秋座芸術監督プログラム「市川猿之助春秋座特別舞踊公演」の開催を記念して歌舞伎・獅子・猿・亀をモチーフにした現代根付を展示させていただきました。このように当館内での作品展示だけに留まらず館外展示を推進して、一人でも多くの皆様に現代根付の魅力に触れていただき、我が国固有の文化の素晴らしさを再発見してもらえる活動に取り組んでまいります。併せて、新しい根付作家の発掘は根付文化の継承にとって、必要不可欠だと感じております。その意味でも、今回の京都芸術大学様で根付の展示を行い、多くの学生の眼に触れられたことは、当館にとっても貴重な機会をいただくことができました。引き続き、京都市内や他県での美術博物館等での展示も調整しておりますので、随時発表させていただきます。

作家「空観」の視点『根付は舞台』

●根付は舞台

根付は実用の美を持ちますが大きく２つの分類があります。一つは対象を単純化させながら、湾曲させながら丸くしていく方法と、もう一つはいくつかの対象を組み合わせて積層的に構築していく方法です。しかし両方に共通しているのは作品に世界観を表現していくことだと考えます。つまり物語性を詰め込むことです。まさに作品は舞台であり、さまざまな登場人物がストーリーを繰り広げるところに魅力があります。手のひらの虚構の世界ではあるけれど、観照する人にさりげない幸せや一歩を踏み出す勇気とか明日に向かう希望を作品から感じてもらえたら嬉しいことです。そこでの私は、創作の名を借りた演出家なのです。

●虚構がほのめかす本質

根付はそもそも虚構を楽しむ芸術です。虚構に心を解き放つ装置でもあります。事実を並べても人には真実の再現にはならないと思えるため、作者の視点と解釈を加えながら虚構のなかに物事の本質を忍ばせようと試みます。そのためには虚構のなかにほんの少しのリアリティ（現実性）が重要になってきます。事物を単に彫るだけでなく、物語との関連性を持たせることで主題との調和が生まれます。様々な伏線を張り巡らしながら、その解読を促すことで、作品の世界観に誘う。そのため根付は理知的なゲームであり、思いもよらない刺激や発見の宝庫なのです。アイデアがまた新しいアイデアを呼び、発想の連鎖をもたらす芸術でもあるのです。

●現代における根付の役割

「天下盗り」 高4.9cm

根付は作り手だけのものではありません。持ち手（担い手）のもとで過ごす時間の方が長いのです。作り手はわずかな時間を受け持っているに過ぎません。根付の発生以来4世紀その原則は変わっていません。持ち手のために作られた根付という視点に立つと持ち手の生きる姿勢や自己主張を内包しながら、凛とした面構えで腰元を飾っていたことがわかります。きっと個人一人ひとりの自由の標榜であり、個性の開花であったことでしょう。根付の由来は定かではありませんが、私は「根」は人の深層にある「こころ根」「性根」を身に着けるというところから名づけられたものだと思っています。現代のデジタルヴァーチャルな社会ではフィジカルや「モノ」の実在は薄れ、多様化が進むほど没個性的な「モブ（大衆）」を生み出していく傾向にあります。そんななかますます求められるのは実在する手応えと型破りな個性だといえますし、それらを備えているものは根付だと思っています。

及川 空観（おいかわ くうかん）

根付彫刻家。躍動感ある造形美を追い求めながら、自由な発想と物語を盛り込んで根付の新境地を展開している。

2022年 4月～6月の特別企画展のご案内　## 美術と工芸の交差点『根付のたくらみ』展

4月「金工と象嵌の華麗な挑戦」展	5月「漆芸の典雅な味わい」展	6月「精緻な彫刻と技巧の極致」展
■ 4月1日(金)～30日(土)	■ 5月1日(日)～31日(火)	■ 6月1日(水)～30日(木)

京都 清宗根付館　公式ホームページのTwitter、Instagram にて、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

第９回 水木十五堂賞受賞（奈良県大和郡山市より授与）
家庭画報 2月号に掲載、NHKプレミアム「美の壺」出演

公式サイトはこちらから ▶

コロナウィルス感染症による感染拡大防止への取り組みに関して

- 入館時にスタッフにより、非接触による検温と手指のアルコール噴霧をいたします（37.5度以上の発熱がある場合は、入館をお断りさせて頂く場合がございます）。
- 万が一、コロナウイルス感染者が発生した際の対策のため、入館時に住所・氏名等のご記入をお願いしております。
- マスクの着用にご協力をお願いいたします。当館スタッフもマスク着用で業務にあたらせていただきます。

公益財団法人 京都 清宗根付館 とは

当館は、佐川印刷株式会社 代表取締役会長CEO 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね（宗）とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、<魅せる><育む><繋がる>を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。

SAGAWA PRINTING
佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館を応援しています。

宗 Salon
現代根付
Contemporary Netsuke Newsletter

WINTER ~SPRING　Issue. 07

［目次］

■ 企画展の見所
■ 清宗根付館便り
■ 作家から見た根付

［発行元］
公益財団法人 京都 清宗根付館
〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町46番地（壬生寺東側）
電話 075(802)7000
www.netsukekan.jp/

日本で唯一の現代根付専門美術館　京都 清宗根付館『企画展』のご案内

現代作家による『心に響く創作根付』展

新春を寿ぎ、皆様のいやさかをお祈り申し上げます。
本年最初の企画展では現在活躍している根付作家３名を取り上げて、それぞれの個性に焦点を当てます。現代根付は約半世紀前を起点に、従来の図柄にこだわらずに、現代的な感覚を大切にして、新しい表現を目指す機運が高まりました。1970 年代当時の根付業界では少数の高級根付を除けば象牙置物彫刻に比べて根付の地位は低く、工房を主体にした分業生産が多くありました。海外からの注文に応じて外国人の嗜好に合うような古典的で画一的な題材が主流でした。そうした状況のなか分業ではなく、作家が制作工程のすべてを一貫して手掛ける「一作（いっさく）もの」を推進していくことになります。それまでの工房制から脱却することで、また高級根付に新たな現代的視点を与えることで、より個人の創造性を発揮した作品が生み出されました。その後芸術の風潮や時代の流行によって新奇の技術を進取しながら現代根付は発展してきました。今回は独自の表現で知られる現代根付作家 3 名を紹介します。1月は緻密な刀技で迫力のある端麗な作風の森哲郎氏、2 月は懐かしい郷愁を誘う柔和な作風の工藤道齋氏、3 月は六面を使いながら物語を展開させていく幻想的な作風の田神十志（たがみとし）氏を特集します。

告知ポスター

2022年1月～3月 企画展の見所 ※掲載の根付は原寸サイズです

1月 冴えわたる彫技 ■1月6日(木)～30日(日)

「森 哲郎」展

峻厳な頂きを目指す、孤高の求道者

1960年東京都出身。東京芸術大学で油画を専攻し、アカデミックな芸術理論と技法を学びました。94年当時にテレビ放映された根付作家の特集番組を偶然見たことで興味を持ち、根付の制作を始めました。その後稀代の古典根付蒐集家で知られる関戸健吾氏に師事したのをきっかけに古典を研究しながら独自の写実様式を確立しました。今にも動き出しそうなダイナミックなコンポジション(構図)と緻密で妥協のない刀の冴えが特徴で、作品は圧倒的な存在感を漂わせています。

「雷風神」 高4.3cm

仏教では千手観音の眷属として二十八部衆とともに守護する役目がある風神雷神。二尊を組み合わせて四方天地どこから見ても見処があるように構図を工夫しています。

「萬代舞」 高6.3cm

令和改元に伴い天皇のご即位を祝う舞楽「萬代舞(よろずよまい)」が伊勢神宮に奉納されました。その祝賀行事を記念して木彫作品に、格調高い風格を漂わせます。

「九紋竜史進」 高4.9cm

『水滸伝』の登場人物で人気が高い英傑 史進が山賊の頭領・陳達(ちんたつ)を打ち倒す場面です。歌川国芳の浮世絵を巧みに翻案し、躍動感を与えています。

「吉祥天」 高5.4cm

美と豊穣、繁栄を顕す女神として知られる吉祥天。見る人の災いを除き、願いを叶えることができるように左手に如意宝珠、右手に与願印を結んでいます。背面の吉祥雲が吉事を運んできます。

「一家団欒」 高3.7cm

コロナ禍で外出がままならなくても、家の中でも楽しく過ごせるという思いから明朗快活な家族の様子を作品に。何気ない日常を取り戻したいという作者の願いが伝わります。

2月 しみじみとした情趣 ■2月1日(火)～27日(日)

「工藤 道齋(茂道)」展

幻想と詩情があふれ、心癒される微笑み

1950年青森県出身。本名は茂道。作家のきっかけは19世紀に活躍した根付師 尾崎谷斎(こくさい)に魅せられて96年から牙彫教室に通い伝統技法を学びました。谷斎や木喰上人に私淑し、丸みのある造形に親しみやすさと大らかさを表現するようになり、2013年から道齋の刻銘を用い始めました。浮世の暮らしに寄り添い、温和で軽妙な作風で知られ、伸び伸びとした解放感が魅力です。そこには人情味あふれる文化や郷愁の心象風景が広がります。最近は歌舞伎に取材した作品も手掛けるなど創作の幅を広げています。

「秋田竿灯まつり」 高8.4cm

厄よけ、五穀豊穣などを願う秋田竿灯まつり。竿灯を腰に乗せるには熟練が必要な大技で、祭りのクライマックスを手に持った扇で盛り上げます。鹿角の形状がうまく活かされています。

「歌舞伎 三社祭」 高6.3cm

江戸の浅草寺の観音像を隅田川から引きあげた漁師の兄弟が善玉、悪玉に取り憑かれますが、やがて退散するという筋立てにコロナの退散の願いが込められています。

「阿国幻影」 高4.3cm

歌舞伎発祥の祖として知られる出雲阿国を歌舞伎化した坂東玉三郎氏をもとにした作品で、女形の持つ妖艶さを引き出しています。雪月花の三部作の一つです。

「番町皿屋敷」 高5.3cm

明治後期から大正時代にかけて新歌舞伎と呼ばれ、近代的個人の心理描写を描き出した『番町皿屋敷』は人気演目で、その一番の見どころを作品化しています。

「王子様の心象」 高7.7cm

サン＝テグジュペリによる「星の王子様」に触発された作品で、手には赤いバラ、足元には智恵の象徴であり「肝心なことは目に見えないんだよ」と伝えたキツネがいます。

3月 あふれだす物語 ■3月1日(火)～31日(木)

「田神 十志」展

物語のコラージュが生み出す、新しい神話

1957年静岡県出身。伊豆には運慶の仏像五体が伝わり、深い縁を感じるといいます。根付を始める前は、自然科学や生物学の研究とハンズオン(実際に触れられる)展示する制作に携わったという異色の経歴を持ちます。富士山を通して自然を敬い、生きものたちとの「縁起」に結びつきを感じるようになりました。ハンズオン展示の経験から手で触れる根付独特の面白さに惹かれ、2009年から創作を始めました。「縁起」を現代に紐解き、自然の奥深さや日本人の誇りを再認識させる題材に取り組んでいます。

「迦陵頻伽の微笑み」 高4.5cm

天空の美しい声を発するという迦陵頻伽(かりょうびんが)。上半身が人で下半身が鳥とされています。令和改元と五輪招致を記念して華やかな舞を彷彿とさせる作品にしました。

「三者快談」 高4.1cm

三人の娘が仲睦まじく「快談」している様子を大らかで愛らしい笑顔で表現しています。まるで会話が聞こえてくるように三人の配置に気を配り、手のひらで何度も回して観たくなる根付の魅力を包み込みました。

「左馬」 高4.1cm

馬は右から乗ると転び、左側から乗ると倒れないとされることから、「左馬」には人生も大過なく送れるという、招福のシンボルとされます。首を左に向けて根付らしい丸さの中に収めました。

「弁慶の飛脚」 高4.2cm

弱い立場への同情や応援をする判官贔屓(ほうがんびいき)は源義経に対する哀惜の念を表しますが、飛脚をテーマに弁慶が担ぐ挟(はさ)み箱の上に主人の義経を配して忠臣ぶりがうかがえます。

「狐火」 高3.9cm

狐の口から吹いた火だとする伝承が日本各地に残ります。俳句では冬の季語ですが、蒸し暑い夏や天気の変わり目によく現れるといいます。母狐が子狐に狐火を教えている様子が心なごみます。